

SER no.034; まえがき

著者	佐々木 史郎
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	34
ページ	1-3
発行年	2002-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/1490

まえがき

佐々木史郎

本論文集は、平成12年度国立民族学博物館重点研究プロジェクトの1つである「人類学的歴史像の構築」の一環として行われた国際シンポジウム「東アジア・北太平洋地域の狩猟採集文化研究の新たな視野」(平成13年3月10日～11日に実施)の成果報告であり、また、平成11年度と12年度の2ヶ年にわたって実施された同じく国立民族学博物館の共同研究である「東アジア狩猟採集文化の研究」の成果報告でもある。まず、東アジアから北太平洋地域を専門とする考古学者と文化人類学者、民族学者が集まって共同研究会が組織され、そこで練り上げられた議論を基礎にして、海外から同地域を専門とする考古学者と人類学者を招いてシンポジウムを実施した。そこでは考古学と人類学が「東アジア・北太平洋地域」という研究地域と「狩猟採集文化」、「狩猟採集社会」という研究対象を共有しあって、活発な議論を展開した。

そのような共同研究とシンポジウムの成果として、共同研究員とシンポジウムの参加者たちが寄稿してきた論文は総計18本(編者の論文も含む)におよび、また、それぞれが力作であったことから、各論文の内容に応じて、2冊の論文集に編集した。1つが『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』(国立民族学博物館調査報告 33)であり、もう1つがこの『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告 34)である。前者は考古学の立場から狩猟採集文化、社会の研究の新しい視野を切り開こうとする諸論文をまとめ、後者には人類学、民族学の立場から書かれた諸論文をまとめた。両者はそれぞれ独立した論文集であるが、共同研究とシンポジウムの成果報告という性格は共有している。

当初この成果報告集は『国立民族学博物館研究報告別冊』として刊行する予定であった。執筆者たちにもその予定で執筆を行ってもらっていた。しかし平成14年度よりこの刊行物が廃止され、日本語で執筆された共同研究やシンポジウムの成果は外部の出版社に依頼するか、速報性、資料性を重視した『国立民族学博物館調査報告』で刊行することとなった。編者としては外部出版の可能性も考えたが、18編の論文、それも人類学と考古学と分野が大きく異なる論文をまとめて出版するのは非常に難しいことがわかり、さらに、速報性と貴重な一次資料も豊富に盛り込まれていることも考慮に入れて、『国立民族学博物館調査報告』として刊行することを選んだ。

本書ではできる限り用語、記号、略号などの統一を図ったが、各論文の著者の意向を汲んで、若干の不統一を認めている。例えば、狩猟を行う人、あるいは狩猟業に従事する人に関しては「狩人」、「獵師」、「狩獵者」などという言葉が使われているが、意味の相違に応じて使い分けているわけではなく、各著者の意向に添って異なる名称が使われているだけである。

目 次

まえがき	佐々木史郎	1
開かれた系としての狩猟採集社会の研究	佐々木史郎	5
第1部 北太平洋・カナダ極北地域の事例から		
ラブラドル・エスキモーの資源利用と毛皮交易 スネンガック遺跡 Nunaingok site (JcDe-1) の 動物遺存体の分析を中心に.....	手塚 薫	17
18~20世紀におけるベーリング海峡地域の先住民交易と社会構造	岸上伸啓	39
20世紀前半における“トナカイチュクチ”とアメリカ人との毛皮交易 シベリア北東部のチャウン地区の事例	池谷和信	51
階層制社会とその経済的基盤 カムチャツカの事例から.....	ヴィクトル A. シュニレルマン	71
第2部 東アジアの事例から		
近世末期におけるアイヌの毛皮獣狩猟活動について 毛皮交易の視点から.....	出利葉浩司	97
ロシア極東アムール流域と東シベリアにおける先住民族の狩猟漁撈活動	田口洋美	165
台湾原住民族の狩猟方法 日本統治時代の資料から	野林厚志	215

